
天国からの遣い

はく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天国からの遣い

【Nコード】

N6613K

【作者名】

はく

【あらすじ】

ショートショートです。毎回がハッピーエンド。読む人の心を癒します。

私は戻って来た。

想い出の地へ。

彼を亡くして、3年の月日が経った。

初めて、彼に出会った想い出の地。

幼き頃の想い出。

変わらない。

風に揺れる草葉と秋の香り。

「サクちゃん、私、戻って来たよ。教えてよ。私はどうしたらいいの？」

私は誰に話しかけているのだろう。

彼は死んだのだ。

私を残して、遠い、遠い、天国へと旅立った。

「サクちゃん、私・・・」

鮮やかなオレンジ。

秋の夕焼けが私を優しく包む。

私は見えない何かを掴もうと手を伸ばしていた。

秋の夕焼けに。

その指先に1匹の赤とんぼがとまる。

動けなかった。

『アヤカ、自分の道を進め』

「サクちゃん？」

誰かの声が私の頭に響く。

私には声の主がわかっていた。

忘れられることの出来ない声。

彼の優しい声だ。

「聞こえるよ、サクちゃん」

『アヤカ、過去を振り返るな。オレのことは忘れて前へ進め』

「何言ってるの？、サクちゃん。忘れることなんて出来ないよ」

『オレは死んだが、アヤカの思い出の中で生きている。前へ進め』

「嫌よ。忘れない」

『アヤカは変わらないな。オレはそんなアヤカが大好きだった』

「サクちゃん・・・」

『大丈夫だ。アヤカは一人ではない。前へ・・・進め・・・飛ぶんだ』

秋の風が私を包む。

「あつ、・・・・・・・・」

指先にとまっていた赤とんぼは、風に乗り、空へ帰った。

気がつくと、夕焼け空いつぱいの赤とんぼが。

私は一人ではない。

「サクちゃん、私、忘れないよ。ずっと忘れない」

その時、鞆の中の携帯電話が鳴った。

赤とんぼはその音に驚いたかのように、秋の空に消えた。

携帯電話を取り出し、耳に当てる。

「はい」

「アヤカさん、ボクです」

「ユウ君？、どうしたの？」

「ボクは貴女に伝えなければいけないことがあります」

「うん？、何？」

「ボクは・・・」

「うん」

「ボクは貴女を・・・」

「うん・・・」

「ボクはアヤカさんを愛しています」

「・・・うん、ありがとう」

私は一人ではなかった。

電話を切る。

「サクちゃん、ありがとう。私、前へ進むね。でも、忘れないよ」

夕焼けは色を変える。

秋の夜空。

星の光のシャワー。

優しく、温かい星の光。

「ありがとう、サクちゃん」

天国からの遣い

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6613k/>

天国からの遣い

2010年10月11日13時31分発行